古畑直定朗

～さよなら、直先生～

1

発端

「えーみなさん、お久しぶりです。古畑です。今回は、あのＡＲの５人衆と、一人一人対決していくという物語です。エへへ。大変緊張しております。えーまずは、芝直定君と対決しましょう。」

千葉県幕張市。田嶋総合音楽学院。

「では、今日の授業では、“Ｃコード”の復習から始めたいと思います。」
この田嶋音楽学院ギタークラスには、二人の教員がいる。
「おい！芝ぁ。Ｃコードなんか、全員出来るだろうが。どーも、お前の進め方は、気に入らねぇよ。俺が今日は、授業担当するぜ。」
「おい、内田…先生。持ち回りって約束でしょ。」
「うっせーな。とにかく、お前は、引っ込んでろ！」
ギタークラス担任は、芝直定。そして、副担任は、内田一徳。しかし、この学校では、内田の父親が理事長をしている関係で、このクラスでも、内田の力は絶大だった。
「わかったよ。じゃあ、よろしく頼みます。」
「頼まれなくたって、やるっつーの。なっ。芝。」
「・・・・。」
そして、結局、その日、直定が話すことなく、授業は、終わった。
「実はよ、芝。」
「何ですか？」
「俺、考えてる事、あるんだわ。」
「何ですか？」
「ギタークラスは、この学校の中でもかなり人気のクラスだ。今の状況では、やはり無理だと思う。だから、教員を増やして、クラスも２クラスにしようと思っているんだ。」
「うん。良いアイデアだと思うよ。」
「それでな、芝。お前には、山梨にある田嶋山梨ギター教室へ、異動してもらおうと考えたんだ。」
「・・・え？」
「お前はさ、小学生ぐらいのガキ相手に教えてるほうがお似合いだって事だよ。ハハハ。」
「ちょ・・・。」
「まっ、こっちの事は、心配するな。俺が学年主任やれば、なんとかなるさ！」
直定は、そのまま何も言えなくなった。
その夜。ギタークラス教員室。
「おぉ。芝、まだいたのか。残業なんて珍しいな。まっ、お前には、残業よりも残尿の方がお似合いだけどなッ。ハハハ。」
「一徳、俺さ、色々考えたんだけどさ、やっぱり、ギタークラスは、一徳に任せるよ。やっぱり、俺は、山梨に隠居でもするわ。」
「やけに、素直じゃんか。ハハハ。」
「あぁ。でもな。俺が山梨に行っても、きっと戻ってくることになるぜ。なぜならさ！」
直定は、ギターを大きく振るかぶり、一徳の頭を目掛けて、殴りつけた。一徳は、その場に倒れた。
「・・・ざまぁみやがれ。」
そして、直定は、すぐに、犯行現場を作り始めた。棚の上にあったギターの一本が落ちてきて、それが、たまたま一徳に命中したようにした。そして、教官室を密室にする為、部屋の電気を消し、窓から外に出た。直定にとってこの現場で、幸いしたのは、建物が古く、窓を揺らすと、鍵の開閉が簡単に出来る事だった。
そして、直定は、時計を見た。
「午後８時５５分。管理人は、確か、９時に来るんだったな。」
見回りの管理人が、９時に来ることを知っていた直定は、何食わぬ顔をして、正面玄関から、建物へと戻った。
そして、廊下の奥の方から、
「たっ、大変でぇーい！内田さんが・・・内田さんが死んでるんだがなー！」

北九州弁訛りのある声で、警備員の太田川が叫んでいた。直定は、ふと笑みを浮かべ、すぐに打ち消して、現場へと走った。
「どうしたんですか？！う、内田先生！なんてこった。太田川さん！すぐに警察に連絡して！」
「は、はい！」
直定は、これで完璧だと思った。

それから、２０分後。警察が到着した。
「警視庁の、泉舞です。えーと、第一発見者は、太田川さん、あなたですね。」
「はい。私です。」
警備員の太田川は、まだ、震えていた。と、そこへ。
「あー、また見逃しちゃったよー。へへへ。テレビ東京の大河ドラマ「大文字焼き太郎」。全く。あっ、どーも。古畑直定朗と申しますぅ。えー、ＤＩＥさん？」
「あっ、コチラ、第一発見者の太田川さんです。」
「で？」
「いや、で？じゃなくて！」
「あっ、ごめんごめんＤＩＥ。」
「で、あなたが、この方のご遺体を発見されたと。」
「えー、もーね。ビックリでっしゃろ。そげん、わぁーと叫んでしまったら、芝先生が飛んできてくれたんですよ。」
「芝先生？」
「内田先生と同じ、ギタークラスの担任の芝直定先生ですよ。」
「へへへ。その方、呼んでいただいてもよろしいですか？」
しばらくして、芝直定がやってきた。
「ギタークラス担任の芝直定です。」
「警視庁捜査一課の古畑どす。」
「どす？ＴＯ・ＴＯ・ＤＩＥ？」
「Ｏｈ！ＴＯ・ＴＯ・ＤＩＥ！」
「古畑さん！」
「えー、へへへ。あなたが、第二発見者ですね。はい。」
「えー、そーですが。」
「内田さんの死に関して、何か、心当たりは、ありませんか？」
「うーん、特にありませんね。まぁ、強いて言えば、最近、授業のし過ぎで、疲れていたみたいですがね。」
「そうでしたか。」
「自分の授業に不信感、あったみたいですよ。」
「古畑さん、今日、俺、用事がありましてね、もう帰っても良いですかね。」
「自殺のようですしね。大丈夫ですよね？古畑さん。」
泉舞刑事が聞いてきた。
「泉舞、あとで話ね。じゃ、芝さん、今日は良いですよ。えへへ。」
「じゃ。」
芝は、帰り支度をし始めた。古畑と泉舞は、教室の陰に行き、
「怪しいねー。」
「えっ？何がですか？」
「芝。」
「古畑さん、まさか？！」
「うーん、きっとぉ、彼、犯人だね。」
古畑は、そう言うと、部屋を出て行った。そして、現場へと戻り、見渡した。
「窓の鍵が古い…。うーん。フフフ。」
そして、玄関に走り、芝直定を引き留めた。
「まだ、何か？」
「芝さん、この学校は、長いんですか？」
「そうですね。もう５年目になります。」
「そうですか。亡くなった、一徳さんは。」
「あいつは、３年目ぐらいですね。それが、何か？」
「いえ、ちょっと気になっただけです。」
「そうですか。」
「ちなみに、殺害された一徳さんと、トラブルとかありましたか？」
「いや、ないけど。・・・ってか、今、殺害って言いましたよね？」
「あぁ。言い忘れてました。これは、まぎれもない、殺人事件です。はい。」

「そ、そうですか。」
「理由、知りたい？えへへ。」
「出来れば。」
「窓の鍵が、半開きだったんですよ。」
「それは、かけ忘れただけじゃないですか？この建物自体古いですからね。」
「私も最初は、そう思いましたよ。でも、よく見ると、半開きなんですよ。わかりますか？普通、窓の鍵なんて、半開きになることなんて、ないですよね。そんなビミョーな事をするんだったら、ちゃんと締めるか、ちゃんと忘れるかですからね。」
「つまり？」
「あの窓、古いですからね。どーやら、外から、揺らせば鍵、締められるみたい。」
「そんな事、出来るわけないでしょう。」
「じゃ、やってみましょう。」
二人は、現場へと戻った。
「古畑さん、遺体は、ココに…いや、机のところにいて、それで、この窓ですよね？」
「えぇ。」
「やっぱり、自殺なんじゃないかな。」
「なぜ？」
「だって、ドアだって、鍵が閉まってたわけで、殺して、窓から逃げるなんて、この状況からじゃ、言えないでしょ。」
そういうと、直定は、外へと出て行った。

「えー、皆様、今回の事件、犯人は、確実に芝直定さんです。そして、彼は、実は、殺した時から、ミスを犯していたのです。皆様には、お分かりになりましたかね。えへへ。古畑直定朗でした。」

「芝さん。」
「まだ何か？」
「えへへ。犯人は、あなたですね。芝さん。」
「はぁ？何言ってんだし！このハゲ！このニンニク野郎！」
「ニンニクを馬鹿にするなッ！お前は、すでに、犯行を認めてんだよ！」
「何がだ？！」
「電気です。部屋の電気ですよ。なぜ、自殺するのに、電気消したんですか。わざわざそんな事、しなくて良いでしょ。」
「そんなの、いないように、したかったんじゃないんですか？」
「そして、あなたは、もう一つ、ミスを犯した。」
「・・・何だよ。」
「なぜ、警備員の太田川さんが、見つけて、駆け付けたあなたは、すぐに、救急車を呼ばなかったんですか？自殺だと思っても、普通、最初に呼ぶのは、警察ではなく、救急車ですよね。」
「・・・。」
「あなたは、殺された事実を知っていた。一徳さんが死んでいるのも知っていた。
だから、警察を呼んでしまったんですよ。違いますか？」
「・・・憎かった。とにかく、あいつが。毎日、散々だったんだ。何とか、ならないかと思ったけど、さすがに無理だった。」
「でも、芝さん、あなたは、音楽家であり、ギタリストですね。」
「大好きなギターをかき鳴らして、それを色んな人に教える事が出来て、仕事に関しては、本当に文句がなかった。でも、あいつが・・・あいつが。」
「本当のギタリストなら、ギター使って殺人なんか、犯しません。」
「・・・ＤＩＥ。」
直定は、その場に崩れ落ちた。
「行きましょう。」

2006年12月31日発行
作・三楽亭田嶋